



写真1
モンテ・オリッピーノで友人たちのために作品を「奏でる」ブルーノ・ムナーリ

(注：水車のこと)の傍らで多くの時間を過ごし、「絶え間なく変化する色、光、大きな水車の動きがもたらすスペクタクルを観賞しました」。水滴が放つきらめきの中で、雨音、小麦粉と水と土と苔が混ざった匂いにつつまれて…すべての感覚を介して自然に「浸った」少年、自然の変化、水や空気の動きに目を凝らす行動的な観想家…。自然の力強さを暗示するこれらの事象は後に芸術作品として姿を変えて、私たちが生きている世界を別の表現で見せてくれます。

ムナーリは語っています、「子どもの頃から私は実験家でした…、通常の使い方をしているものを、それ以外の使い道で何かをすることができるのかを知りたいと思いました」。

人は大人になり、「社会」の一員となると、理性と言葉が優先して感覚の受容器が閉ざされてしまいます。児童の学校教育の段階から感性の教育を推進し、子どもたちが型にはめられず、あらゆる感覚を発達させることができるよう育成しようではありませんか。子どもたちの精気を失わせないようにしようではありませんか！



写真2 フォトコピー機で遊ぶ(1991年筆者のラボラトリオにて)

写真撮影：ルカ・チェネレッリ

遊びとは真剣なものです

ある人が、アトリエに入るなり、「ああ、あなたはとても運がいいんですね、いつも遊んでいられるから!」と言うと、彼は「遊びとは真剣なものです」と答えました。それにしても、彼の「遊び」についてどれだけ誤解があったでしょう。遊ぶことは正真正銘の認知行動なのです、と息子のアルベルトは言い添えます。遊びながらの方が学習し易いのは言うまでもありません。

ムナーリは趣味を仕事にするという企てに見事に成功して、一生「遊んだ」のです。ですから、「働くのが苦にならない、素敵で楽しいことだ」とムナーリは言っていました。

息子のアルベルトが生まれると、父親のムナーリは幼い子どものための玩具や本を考案しました…形を変えたり、手を加えることができるオブジェ、しばしば「未完成」であることもあり、自由に完成すればよいというものでした。これは彼のメソッドのインスピレーションの源の一つである老子の「自分を押しつけない行為」という教えに立脚するものです。